壮春力歩

会長　鈴木　末一

◆UNDB-J 認定連携事業第 12 弾に認定◇

新入会員が増えましたので、会の歩みに少々触れておきたいと思います。

2007 年の秋、約半世紀ぶりに「ならやま」の西側を走るＪＲのトンネルを潜り抜けた。目の前に広がる情景は、子どものころから脳裏に焼き付いているものとは全く異なり、想像以上に荒涼殺伐としていた。人の手が入らなければ、こんなにまで荒れ果ててしまうものかと思った。

サイクリングロードとは名ばかりで、人通りはなさそうだ。Uターンしようとすると、笹薮の横から人の声が聞こえてきた。何をしているのだろうかと思ったが、そのまま帰宅した。

約一か月後、先日のことが少し気になり、再び「ならやま」へ出かけた。「景観形成整備事業ボランティア活動・奈良県」という表示があった。先日の人たちは、ボランティアグループの方たちだと判った。その後も何回か出向いたが、高さ 3～4m の笹薮などに覆われたままであり、1 か所だけ整備途中の畑があるが、サイクリングロードを東進していく気にはなれなかった。

定年後の 2 度目の勤務も終え悠々自適もどきの生活を続けていた 2008 年暮れ、「ならやま」の状況が少し気になり、ネット検索でグループについての予備知識を多少仕込んで出かけた。里地での畑整備が少しずつ進められていた。メンバーの方に挨拶をし、活動の様子などをお聞きした。

日本の原風景である里山林の情景を蘇らせようとする気概に満ち溢れる方々でした。その開拓者魂に共感し、即刻入会を申し出た。

それから 10 年。その間、景観形成についての確固たるコンセプトと共通理解の大切さを常に確認し合いながら、活動が進められてきた。

まさしく苦節 10 年、里山里地ともに整備保全の進展により、生物多様性復活の兆しが、年を追うごとに確かなものとなっていった。今日までに同定(生物の分類上の所属や名称を決定すること)することができている昆虫が約 600 種、植物が 300 種にのぼる。他の生物の同定も今後の課題である。

「ならやまプロジェクト」と命名した活動の 10 年間だ。劣化している生物多様性を回復・進化させる景観整備を進め、生物多様性に配慮し、保全に重点を置いた「保全的自然保護」活動を推進してきた。例えば、樹木調査は里山林 5ha 余を 30 分割し、全木調査を実施。群落特性をまとめた台帳を作成し、2010 年に生物調査の報告書「ならやまの四季」を作成した。また、「遺伝子汚染」の心配のない環境を取り戻すことにも力を注いだ。ニッポンバラタナゴの育種池として、近畿大学農学部環境管理学科保全生態学研究室の要請を受け、2011 年から保全育種に取り組み、軌道に乗りつつある。こうした活動の歩みをまとめ、国連「生物多様性の 10 年」日本委員会が主催する生物多様性アクション大賞 2016 年に応募した結果、入賞することができた。今後は、「保全的自然保護」から、保全した自然から新たな機能・価値を生み出す「自然再生・創出」へと進めたいと考えている。

今年 3 月、環境省並びに国連生物多様性の 10 年日本委員会（UNDB-J）から認定連携事業として認定された。

認定のポイント(取組の重要性)は、自然観察、里山整備、文化行事、環境教育など多彩な活動を通じて、生物多様性の保全と持続可能な利用について取り組む活動であること。また、対象を青少年だけでなく、保護者や一般市民へと拡大し、相互に共有体験できるステージを提供し、環境問題への意識高揚と豊かな発想力の涵養、そして、里山再生保全から里山機能創生活動へとスキルアップを図っていることが評価された。